じりつ そうぞう 豊かな心　　私らしく生きる

野比だより

横須賀市立野比中学校

令和４年(2022年)３月８日(火)　NO. １３

保護者の方と一緒に読みましょう

卒業おめでとう！　～社会の形成者として野比中生に考えてほしいこと～

いよいよ明日、３ 年生はこの野比中学校を卒業します。３ 年前に入学してきた時から一緒にその姿をみてきました。いろいろなことが一人ひとりにあり、失敗と感じた苦い思い出も仲間とともに頑張った楽しかった思い出もすべてが３年生のこれからの人生の宝物となります。1･2 年生にとっては、部活動や委員会活動でお世話になったり、憧れたり、その背中をみて、この ２ 年間を過ごしてきたことと思います。それぞれに素敵な夢や力をもった ３ 年生の一人ひとりを紹介することはできませんが、今回はみなさんにも考えてほしいこととして、２人の３年生の作文を紹介します。

いずれ、みなさんはこの社会の担い手になります。今だって、大事な市民･国民の一人です。大人になりお金をかせぐようになれば、納税者となります。３ 年の社会の授業で学ぶことですが、社会に関わっていく中で、税のことを知り、考えることはとても大切なことです。３ 年生が夏休みに応募した「中学生の『税についての作文』」で「横須賀税務署管内納税貯蓄組合総連合会　優秀賞」を受賞した杉田さんの作品です。

私の知らない税は、

横須賀市立野比中学校
三学年　杉田　梓乃

私は「税」の詳細について全く知りません。税と聞いて思いつくものは、消費税とか、払わなければ罰せられるとか、そのくらいです。また、自分にとって良い印象のものではありませんでした。しかし、私の知らないその単語は、国を動かしていく、重要なはたらきをしていました。

調べていく中で、税と税金、二つの単語が色々なウェブサイトから出てきました。私はその違いについて気になりました。税というのは国や地方公共体などが、国民から取り立て、〝納められる〟お金であり、税金というのは国や都道府県などに国民が〝納める〟お金という意味です。ただ、それらの違いを調べても、出てきませんでした。

私が考える、税と税金の違いは、簡単に言えば、主権的か客観的かというものではないかと思いました。国は納められる、税と言える側、つまり、客観的立場であり、国民は納める、税金と言える側、つまり、主観的立場であると思いました。

ところで、私達国民で言う「税金」はどのようなものがあるのでしょうか。

税金には、所得税や住民税、固定資産税、相続税、消費税、市区町村民税など、生活していく中でも、種類が沢山あります。学生の私は耳にしない単語ばかりです。ただ、それらは、大人になると関わりが深くなり、私達が暮らしていくうえで、払わなければいけなくなる税金です。難しくて、「納税は面倒くさそう」なんて思ってしまいます。

しかし、なぜ納税をしなければならないのか、それは自らが、国を支えるためなのです。

国民が納めた税金は、福祉や消防、ごみ収集などの公共サービス、学校や公園、道路などの公共施設、学生が使う教科書などの道具にも使われています。暮らしのまわりで見るものや学生が通う学校など、私達の身の回りのものの多くが税金によってできています。こうして、税金は国、国民を支えています。

私が知る税金の一つ、消費税は、学生でも払っているもので、百円の物を買うとき、十円プラスされます。その十円玉を払うことも国の支えになる一つの行動ということです。

税金の使い方は全て国が決めています。国の代表である国会議員はその税金をどう使うのか、様々な考察をし、実行します。国は客観的立場と言ったが、視点を変えると、国を動かしている、主観的立場となります。

こうして、国と国民とが違う形ながら、国を支え合い、動かし合い、発展させています。

私の知らない単語であった「税」。それは、国民の身の回りに使用されており、暮らしをまわし、学生である私自身の日常も助けるなど様々なはたらきをする重要な存在なのです。

1･2 年生は先日「一人ひとりの性のあり方を尊重するために」というテーマで LGBTQ について理解を深める講演会を通して、「人権」というものを考えました。また、3 年生は直接この作品を通して、道徳の授業で世界人権宣言について学び考えました。人は一人ひとり違います。容姿も性格も考え方も様々です。でも、すべての人の命が尊重され、幸福であることを実現していかなければなりません。今、この時も世界では命が脅かされている人がたくさんいます。身近なところで差別があることも、世界で起きている問題も知らなければ解決することはおろか、考えることもできません。だから、多くのことを学び、知り、考えることが大切だと思っています。右の作品は「全国中学生人権作文コンテスト･横須賀地区大会」で入賞したディキャラさんの作品です。

1･2 年生も読んで考えてみてください。

そして、自分の身近なことにも、世界のことにも関心をもてる野比中生であってほしいと思います。

銅賞

私と自分

横須賀市立野比中学校三年
ディキャラ　幸一

私の名前はディキャラ・ガマララゲ・トゥウイン・幸一です。父がスリランカ人で、母が日本人のハーフです。弟もいて、私も弟も肌の色や目の形が母よりも父の方が似ています。この肌の色や目の形だったり自分の体が、周りの日本の子と少し違うだけで、幾度となく、私は嫌な思い、悲しい思いをしてきました。

幼稚園に入っていた時です。私がブロックで遊んでいると、同じ組の子が「おい、外国人はここにいるな、ここは日本だぞ。」と言われました。私はその時とても悲しくて、悔しくなりました。「そうか、僕は体の色が周りの子と違うから、皆と遊べないんだ。」と。

そして、卒園した後、小学校に入学しました。入学した時は幼稚園と同じようなことが何度も起こりました。でも、それらを、僕は家族に言うことはできませんでした。なぜなら、言ってしまうと私だけでなく、弟にも、父にも、母にも人権を汚してしまうかもしれないと考えたからです。でも、学校に私がいればいる程周りからの差別的発言が減っていきました。

でも、その中で、色々な人が言ってますが、「ハーフって、カッコイイ。」だとか「足長い、うらやましい」、「目がパッチリでカワイイね。」というのがあります。私は知っています。これが決して悪口ではない、むしろ褒めているのだと。相手には、まったく悪気はなくて、ただ印象を体とからめて、言っているだけだと。その度に、褒めてると分かっていても、次第にコンプレックスになりつつあるのが今の現状です。

このように、無自覚な差別的な発言がある度に私は笑ったり、見せてあげたりして、ごまかしてしまうのです。無視すると、さらに言われてしまうかもしれないと考えてしまうからです。

その後、父の仕事の関係で神奈川に引っ越してきました。ここでは、過激な差別はありませんでしたが、無自覚な差別発言がとても多く、今でもよく言われます。その中でも、二つの事がよく言われます。

一つ目は「名前」です。友達やクラスメイトは、私の事を知っているのでないですが、初対面の子には名前を説明すると「ガマララ、えっガマガエル？変だね。」と言われることがあります。ふざけているのだと分かっていても、家族からもらった、二つの国からもらったこの名前をバカにされるのはとても悲しいです。

二つ目は「腰の高さ」です。私は、腰がすごく高い位置で、脚も長く、足が長いのです。それを周りの子に言われることが、私の中では、気付かない内にコンプレックスになっていました。

でも、そんな時、父は「周りだけでなく、自分を見なさい。」と私と弟に言いました。その時僕は気付いたのです、「人の外見だけが全てじゃない。」ということを。

皆さんはこの歌詞を知っていますか。

「生まれたところや皮膚や目の色でいったい僕の中が分かるというのだろう」これは、THE BLUE HEARTS（ザ ブルーハーツ）の「青空」という曲の歌詞です。これを聞いて、あなたは何を思いましたか？

ただ、外見、大きさが違うだけで、その人の事、国の事を非難することは決してやってはいけない事だと思いました。そして、その考えが何故生まれてしまうのか。私は、「人間の自衛本能」が働いているのだと思います。周りの中で、一人だけ違う人がいる。そう考えて心の中で壁をつくるのです。そして、その壁の中から人を、ハーフを攻撃しているのだと思いました。

でも、その中で思うのは、確実にハーフという存在が受け入れられてきているということです。日本のグローバル化が進み外国人をよくみかけるようになったためだと思います。つまり、周りの人がハーフに対して壁を壊し始めているということです。これって、本当にすごい事だと思います。

現在、世界各国で、外国人の受け入れについて、様々な議論が行われています。その中でも、日本は外国と友好的な関係を持っているので、この先、どんどん外国人は増えるのだと思います。そして、外国人と尊重し合うための、一番身近な存在として、知ることから一人一人が始める事が大切だと思います。

今、５０人に一人はハーフがいると言われています。差別をするのではなく、「自分もあの子と同じだ。」という考えを持つことで、周りだけでなく、自分を見ることができ、互いに尊重し合えるような社会をつくれると思いました。自分達に何ができるかを考えることは、全ての人権問題につながります。逆に自分の考えによって、相手が悲しんでしまう場合もあることを、心に留めてほしいです。